

子どものための展示を考える

おおしまみつはる
大島光春（学芸員）

子どもが多い

当館は、神奈川県立の自然史研究機関であり、自然史資料収蔵機関です。それと同時に生涯学習を目的とした集客施設としての役割も担っています。当館の年間23.3万人（2007年度）の入館者数のうち、子ども（園児＋児童）の占める比率は約40%で、県立の他館（歴史博物館は約15%、近代美術館は5%以下、金沢文庫は2%以下）に比べて高いであろうことが特徴です（他館では子どもの比率は公表されていないので、有料／無料比などからの推定）。

それなのに、子どもの入館者に対して特に何か対応しているかというと、ほとんど何もありません。恐竜の全身骨格や哺乳類の剥製、昆虫など、見ただけで楽しめる標本はありますが、ごく一部の例外^{*}を除いて、子どものための展示がないのです。

では、当館では何もしてこなかったのか、というところでもありません。園児向けはありませんが、小学生から参加できる講座はたくさんありますし、特別展などでは子ども向けのワークショップを行ってきました。最近5年ほどは毎年3月に開催している「ミューズ・フェスタ」の中で「子ども自然科学ひろば」と題するイベントを行い、たくさん子どもたちが双眼実体鏡やデジタル顕微鏡でミクロの世界に親しんだり、パンニングで貴石を探したり、化石のレプリカを作ったりしています。このイベントにはたくさんのボランティアの皆さんのご協力があり、学芸員も総出で対応します。また、毎月第一日曜のファミリーコミュニケーションの日には、学習指導員が恐竜折り紙教室を開催しており、大変好評です。

つまり、イベントとしてならば、子どものための何かを開催するアイデアも力もあるのです。では、問題は何かというと、常設にできないことなのです。イベントならば、全学芸員がエディケーターに徹して、ボランティアのマンパワーの助けを借りれば指導も監視も可能です。しかし、常設にするなら、それに代わるエディケーターを雇用し、そのための場所も必要になります。残念ながら、10年以上連続で予算が削減され続けている

当館の現状を顧みれば、エディケーターの雇用や子どものための展示室を新たに整備することは困難です。

そうはいつても、何もしないであきらめるのも悔しいので、考えてみることにしたら、補助金をもらうことができました^{**}。

まず、条件を整理します。当館のイベントや、他館の展示のようにたくさんのエディケーターや監視員をおくことはできません。それでも安全に楽しめるようにしなければなりません。大きな予算や広い場所の確保も困難です。その上で、体験型とかハンズオンとかと呼ばれる手法を取り入れ、自然史のフィールドへ誘うような動機付けができる展示が理想的です。当館だけではアイデアも設備も限りがあるので、動物園や水族館をはじめとした他館と協力し合うことも大切です。

漠然と考えるより、「制約が多い方がアイデアは浮かびやすい」と言いますが、なかなか厳しい状況です。

行動開始

まず最初に今現在、どこでどのような子どものための展示が行われているのか、他館の例を収集し、まとめておくことにしました。研究メンバー4人は手分けして、国内とアメリカの事例を集めてきました。どこでなにを調べてきたのかについては別の機会に詳しく報告したいと思いますが、東京近郊、関西、九州北部、アメリカ東海岸地域のさまざまな博物館で、子どものためにどのような展示が実施されているのかを調査し、可能な場合は体験してきました。その中から興味深い展示をピックアップしつつ、まだ、他館の展示のリサーチを続けています。今のところ、私が感じているのは、子どもの心をつかむには、「水・砂・重力・生き物を使うこと」が重要なのではないかと、ということです。

樹洞であそぼう！

今年の特別展「木の洞をのぞいてみたらー樹洞の生きものたちー」では、特別展の内容に関連させた子どものための体験的展示スペース「樹洞であそぼう！」を作ってみました。ここには「のぞいてみよう!」、「ぬりえ de おめん」、

「ムササビ飛んでみよう!」の3つのコーナーがあります。

「のぞいてみよう」は特別展のメイキング画像や樹洞からのメッセージ画像がスライドショーでみられたり、クイズの正解が穴の奥にみられたりするコーナーです。

「ぬりえ de おめん」は、特別展のポスターの作者でもある菊谷詩子氏によるムササビ、モモンガ、ニホンアマガエル、フクロウのぬり絵と色鉛筆が準備されています。展示室内の剥製などを参考にぬり絵を楽しんでもらい、家に帰ったらはさみで切り抜いてお面を作ることで、2度楽しめるという企画です。最初はフェイスペインティングを考えて、担当の石浜学芸員はよそのイベントで顔にペイントされる体験までしてきたのですが、技と時間が必要なことや、参加人数が少ないのではという予想から、再検討され、ぬり絵に落ち着きました。

「ムササビ飛んでみよう!」は研究メンバーで、今回の特別展の責任者でもある広谷学芸員が、元になるアイデアを提案した企画です。その提案は「森の景色の上にガラスの板を張り、その上にうつぶせに寝そべることでムササビとして飛んでいる気分を味わおう!」というものでした。しかし、全体重を乗せるとなるとガラスにも支えにもかなりの強度が要求されるので、私なりのアレンジを考えました。①は鏡とアクリルケースを使ったもの（図1上）、②は鏡の代わりに森の



図1 上：案① 鏡とアクリルケースを使ったもの。下：案② 鏡の代わりに森の風景を使ったもの。

風景を使ったもの（図1下）、③として液晶プロジェクターで動く風景を投影したものです。しかし、①は鏡の位置を遠くにできないので、自分で全身を確認することができない、②も風景写真が近すぎて臨場感を期待できない、③は機材を確保できない、ということで、3案とも不採用になりました。

次に、ムササビ視線で飛んでいる映像を撮影し、その映像をうつぶせになって見る案を思いつきました。テレビモニタをどういう状態で見れば、飛んでいる気分が味わえるのか、視点から要求される台の高さや、その台から落下する危険性など、試作しながら検討しました（図2）。

撮影は、ビデオカメラを当館のテラスから小田原一箱根道路のトンネルの上に張った釣り糸につるして行いました。しかし、ビデオカメラを乗せるゴンドラが重すぎた上に、釣り糸が細すぎたために糸が大きくなるでしまい、失敗しました。今度は、より大きな落差を求め、場所を当館展望チューブから前庭へ滑り降りるコースに変更しました。ゴンドラも軽量化を図り（余分な所を切っただけともいう）、滑車も大きな径のものに代えて、さらに釣り糸もカーボン入りの太いもの（マグロも釣れそう）に代えました。5回ほど撮影し、一番良くできたものと途中で木に激突したものを採用しました。

この映像を使った体験コーナーのために、元当館職員^{うみののりゆき}の海野範幸氏の協力を得て、テレビモニタを設置する台、風を感じるための扇風機の制御スイッチ、体験者が乗る台の部分などを製作しました。

「ムササビの着ぐるみを着た子どもが展示室内をうろうろしていたらかわいいよね」という発想から、着ぐるみを作る企画が、並行して動いていました。これも「ムササビ飛んでみよう！」に合体させて、「ムササビ・スーツを着てムササビになりきって飛んでみよう！」（図3）、「飛んだ後は森の風景の前で記念写真を撮ってね」ということになりました。当初



図2 「ムササビ飛んでみよう！」検討中の様子。モデルは田口学芸員。

90 cm 用・110 cm 用・130 cm 用の3サイズのムササビ・スーツを用意しましたが、大人用のリクエストが多かったので、オープンからやや遅れて、160 cm 用が登場しました。

好評だが課題も

この体験的展示スペース「樹洞であそぼう」は、おかげさまで大変好評です（図4）。しかし、課題も見えてきました。1つめは耐久性^{たいいきゆうせい}の問題です。着ぐるみのほつれ、映像装置の固定、色鉛筆やぬりえの補充など、人気があることと使い方の乱暴さによって、予想以上に劣化や消耗に悩まされています。2つめは説明不足の問題です。着ぐるみの着方から、「ムササビ飛んでみよう！」の使い方、ぬりえの参考になる剥製のことまで、映像や文字で説明していますが、なかなか来館者まで届きません。3つめは案内員がいないことです。私たちは来館者だけでも十分理解していただけるよう、考慮・配慮しているつもりです。しかし、案内員から説明した方が展示の意図は伝わりやすいでしょうし、ただ見ているだけでも無茶な使われ方は減ることでしょう。4つめは、「ムササビ飛んでみよう！」について、「小さい子ども向け過ぎてつまらない」という指摘です。小学校高学年くらいから特に多く聴かれます。もともと130 cm までのムササビ・スーツしか用意していないことから、小学校2～3年生くらいまでをターゲットに設定したので無理ありません。手の振り方や体重移動を感知するテレビゲームに慣れていれば、この単純な仕掛けに不満を持つことは理解できます。これはテレビモニタを使うことで、私たちがテレビゲームと同じ土俵^{どひょう}に乗ってしまったことが原因と思われ、反省点です。体重コントローラは無理でも、せめて3D映像を使いたかったと思っています。



図3 「ムササビ飛んでみよう！」完成。ムササビ・スーツを着て、ムササビになりきって飛んでくれている。



図4 子どものための体験的展示スペース「樹洞であそぼう！」。

三つ子の魂…

小さい頃から、例えば5年に1度博物館を訪れると、3歳の時には広いところを走った、8歳の時には子どものための展示を楽しんだ、13歳の時には恐竜がかっこよかった、18歳では進路として考えた、23歳で車を買ってドライブにきてみた…というような人生を勝手に考えると、その最初の頃に「博物館は楽しいところ」と刷り込んで、「また、行きたいな」と思ってもらえるようにしたいという目標を持っています。そのことが、理科離れ、特に地学・生物分野の崩壊を防ぐための一助となることを願っています。

これからの活動に乞うご期待！

補助金による研究期間はあと2年半あります。その間に様々な事例を調査し、より独創的で、効果的な展示を目指して、取り組んでいきます。来館者ならびに博物館関係者の皆様からの応援やアドバイスをお願いします。

*著者にとつての例外は、生命展示室昆虫コーナーの昆虫探しケースと、ジャンボブック展示室のカエルの鳴き声当てコーナーの2つ。ただし、大人にも人気です。

**当館学芸員、大島（代表者）、広谷、田口、石浜の4人で、科学研究費補助金を申請して採択され、昨年度から研究を行っています（基盤研究(C)、課題番号20605018、研究課題「子どものための展示開発－自然史博物館にふさわしい展示と展示プラン－」）。

自然科学のとびら

第15巻3号（通巻58号）

2009年9月15日発行

発行者 神奈川県立生命の星・地球博物館
館長 斎藤靖二

〒250-0031 神奈川県小田原市入生田499

Tel: 0465-21-1515 Fax: 0465-23-8846

<http://nh.kanagawa-museum.jp/index.html>

編集 石浜佐栄子

印刷所 文化堂印刷株式会社

© 2009 by the Kanagawa Prefectural Museum of Natural History.

R100

PRINTED WITH
SOY INK
Trademark of American Soybean Association